



沈澱藍 を 使って染める

11月分

沈 澱 藍

今回は、第5回で実施した沈澱藍を使って染める方法を解説します。

ガイドブックの130頁で取り方を解説してあります石灰による沈澱法、または塩揉みによる沈澱法によって藍液が取れたでしょうか。先の方法では、一度に大量の液が取れるのが利点です。後者の方では、少量の藍しか取れなかった方に向いていると思います。では、これを使って引き染め用の藍建てをして、和紙に文字や絵を書いてみましょう。



湯煎で温めて、溶かす



(注)55℃位に冷ましてから入れる

沈澱藍の容器を見てください。静かに置いておくと、上澄みが透明、またはそれに近い色になっていませんか。容器を斜めにして静かに上澄みを取り除きます。底にはどろどろした藍が残っています。冬のみ、これを温められる容器に移します。30～50cc位用意します。この中に苛性ソーダを小さじ1/3（4～5片又は粒）入れます。（苛性ソーダは、粒または平たい小片なので、普通小さじで計ることはしないのですが、少量の計りがないときには便利です。皮膚や目に触れないよう気をつけて扱きましょう。計量器が使われる場合は、液の重さの0.7%とします。）鍋の中に水を入れて温め、沈澱藍の入った容器を入れて湯煎にします。（写真A-1）溶けましたら、火から下ろしてハイドロを小さじ1/4加えます。夏は、常温で結構で

す。

ハイドロは高温になるとガスが出ますから、苛性ソーダを先に入れて温め、取り出して55℃位に冷ましてからハイドロを入れます。

青かった液の色は、還元して緑色になります。(写真A-2) 温度が高いと黄土色になります。この液は時間が経つと酸化して還元が弱って色が悪くなりますので、早く使用してください。冬以外は常温で建てます。

和紙について

今回は、和紙に書きますので、和紙について解説します。和紙の原料は、コウゾ、ミツマタ、ガンピ等が主に使われています。ミツマタは、主に紙幣になります。ガンピは艶があり、滑らかで写経など文字を書いたり、絵を描くのにも適しています。一番多く使用されている和紙は、コウゾを原料にしてあります。最近はパルプと混ぜた物が出ています。藍染めに使用するには、水につけても溶けないコウゾ100%の紙を使用しなければなりません。より水に強くするためにもコンニャク糊を引いた紙を使用します。コンニャク糊についてはガイドブック25頁に解説してあります。

この糊の作り方で気をつけなければならないのは、少しずつ指でつまんでぱらぱらと振り込むように入れることです。泡だて器で混ぜながら20分溶かすか、ペットボトルに入れて振るようにして溶かします。その後1～2時間置くと滑らかな糊ができます。できた糊を手にとってみて、粒が残っているようだと置く時間が足りません。この糊は藍染めした後のすれ防止に使うこともできますし、藍染めの糸ののり付けにも使用します。手に色がつくのを防ぎます。糊に少量のオリーブ油を加えると艶のある糸になります。しかし、日持ちがしませんので早く使用します。

和紙は先に解説したようにコウゾ紙を使用します。板の上に載せ、糊刷毛を使って満遍なく手早く引きます。乾かしてから、裏面を糊引きします。

※公開はここまでです。